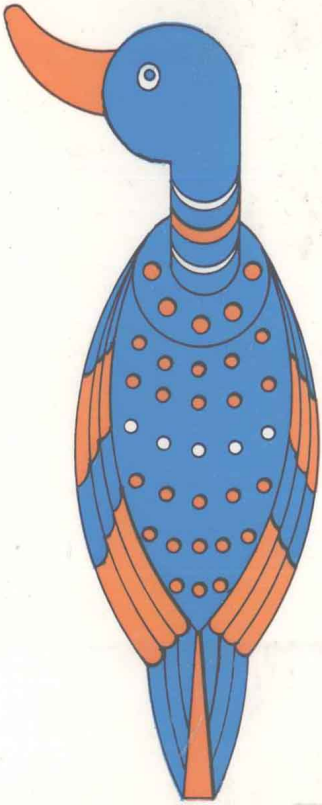
臆病者を友だちにするな

—パキスタン・バングラデシュの民話—

F.A.スチール・ジャシマディン・C.ペインター編
須藤清次訳



勁草書房

臆病者を友だちにするな

―パキスタン・バングラデシュの民話―

F. A. スチール・ジャシマディン・C. ペインター編
須藤清次訳

勁草書房

高きホタル座へ

現代・創作児童文学12

1976年9月／発行©

著者／香川　茂

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社金の星社

〒111　東京都台東区小島1丁目4－3
電話／東京03－861－1506（代表）
振替／東京0－64678

印刷／三浦企画印刷
製本／協和製本株式会社

乱丁落丁本はおとりかえ致しますので，お求めの書店または本社へお申し出願います。

913　香川　茂
高きホタル座へ
金の星社　1976
214 P　22cm（現代・創作児童文学12）

基本カード記載例

8393—042121—1406

もくじ

一　作り話の上手な男（バングラデシュ）　3
二　陶工の娘（パキスタン）　11
三　ジャッカルとウズラ（パキスタン）　28
四　オブジーン姫（パキスタン）　38
五　二人の利口者（バングラデシュ）　57
六　ピージーとビンジー（パキスタン）　74
七　ジャッカルとクロコダイル（パキスタン）　87
八　鏡（バングラデシュ）　96
九　アリ・マーダン王と蛇女（パキスタン）　103
一〇　ジャック・フルーツ（バングラデシュ）　117

一一　船頭と学者（バングラデシュ）　126
一二　二トン力士（バングラデシュ）　131
一三　ジャッカルとイグアナ（パキスタン）　144
一四　三びきの魚（バングラデシュ）　152
一五　理髪師の利口な妻（パキスタン）　161
一六　公平な分け前（バングラデシュ）　181
一七　臆病者を友だちにするな（パキスタン）　190
一八　理髪医師（バングラデシュ）　199
あとがき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　作り話の上手な男

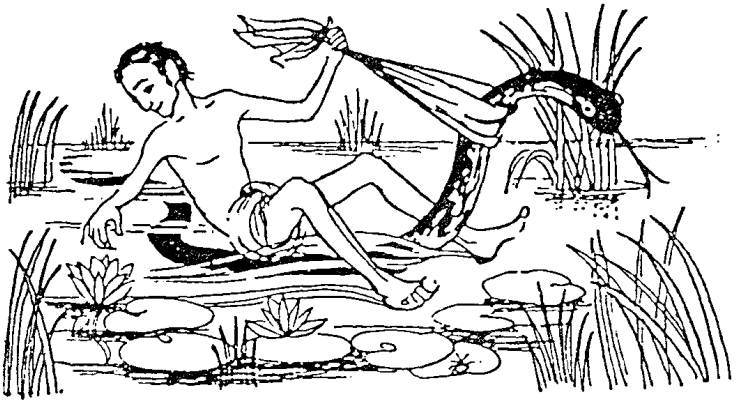
――バングラデシュ――

むかしベンガル（ガンジス川の下流地方）のある村に、作り話の上手な牛飼いがおりました。もしも、昼さがりの暑いさなか、畑や菩提樹の木かげで、あるいは夕暮れ時にこの男の小屋の前で出会ったりすると、誰にでもかならず新しい作り話を語りかけてくるのでした。いろいろな作り話が、雨季の大河の洪水のように、彼の口からほとばしり出てとどまることを知らず、村人たちの物笑いになっても、話を止めようとしませんでした。

「今日、わしが田んぼへ出かけたとき、大へん奇妙なめにあったんだよ。」と語りだすのが彼の口ぐせでした。「道ばたでとぐろを巻いている一匹の大

蛇に出会ったんだ。大蛇はわしを見ると、すぐに追いかけてきたのさ。そこで、一目散に逃げ出したが、木の株につまづきスッテンコと顔を地べたにぶつけてしまった。蛇はわしに追いつき、気味悪い鎌首をもたげ、牙からシェーという音を立て襲ってきた。噛みつかれそうになったが、どうしたらよいかわからない。わしは急いで跳び上り、蛇の背にまたがった。すると、蛇は勢いよく走りだし、わしは蛇の背にしがみついた。蛇は蓮の花が一面に咲いている池につくと、わしを背中に乗せたまま水のなかに潜りこんだ。わしは馬のように手綱をさばき、水から脱け出しながら蓮の花を四つもぎとったんだ。それから、蛇に乗ってわしの小屋へと向かった。蛇を停めようとすると、蛇はマンゴー畑の穴へもぐり込んでしまったのさ。『嘘をつけ』だって、まあ見ろよ。ここにちゃんと穴があるし、蓮の花も四つあるじゃないか。」

村びとたちは彼を笑いものにし、泥や腐ったマンゴーを投げつけました。それでも、牛飼いは次の話にかかるのでした。



「昨日のことだよ。わしはひまわりのてっぺんに蜜蜂の巣を見つけたんだ。そこで、ひまわりの茎をよじ登り、巣の上に座りこんだ。すると、沢山の蜂が巣に群がり、わしが降りようとすると、巣と一緒にわしを運んでいってしまった。蜂は天高く舞い上り、青雲と黒雲に覆われた遠くの国へ飛んでいった。わしの頭の上には夕陽の女神の宮殿が現れてきた。あたりはくれないの粉で覆われた山でとり囲まれていた。わしはその山々を越え、七つもの川を越えて遠い川岸にやってきた。そこへ螢のネックレスをつけた王女が現れた。わしは、王女のネックレスから一匹の螢をつかみとり、日暮れ前に家へ帰

りついたのさ。『嘘をつけ』だって。見なよ、ここにちゃんと一匹の螢を持っているじゃないか。」

またまた、村びとたちは彼を笑いものにし、髪に灯油をこすりつけたりしました。

牛飼いのおかみさんは大へん人柄がよく、村びとの誰からも好かれていました。しかし、彼女が村びとたちのところへやってくると、みんなはがやがやと聞こえよがしにしやべりたてました。「作り話屋のおかみさんがくるよ。あのおかみさんも蛇の話や蓮の花の話を聞いているんだろうか。牛飼いが螢を手にして空から降りてきたのを見たんだろうか。」

それを聞いて、哀れな牛飼いのおかみさんは怒って大声でいいました。「わたしはあなたがたのいうことなど耳にしたくはないね。どうして、亭主を笑いものにし、泥をぶつけたり、灯油を髪にすりつけたりしたんですか。」

しかし、村人たちは大笑いするばかりでした。可哀いそうにおかみさんは

自分の小屋にもどり、ぽつねんとふさぎこんで閉じこもってしまいました。

ある日のこと、牛飼いは田んぼから帰ると、おかみさんにすてきな新しい話を聞かせてやろうとして、「お前、いるかい。」といって語りかけました。

「今日はとてもいい話を作れたんだよ。牛乳をしぼっているとき浮かんできたんだ。」

「いやだこと。お前さんの馬鹿げた話なんか聞きたくもないわ。」とおかみさんは不機嫌に答えました。

「いったいどうしたんだね、お前。」

「そのわけをいえというの。お前さんは人間じゃないわ。馬鹿げた話をつめこんだ袋なんだわ。村中のひとたちがお前さんを物笑いにしているのに、気づいていないの。みんなは、わたしを間抜けな作り話屋のかみさん、といっているんだから。」

牛飼いも妻にわるかったと思い、「それはすまないことをしたね。お前がそ

んなに可哀いそうなめにあっているなんて、知らなかった。どうしたらよいものかね。」

「お前さんの馬鹿げた作り話をみんな袋に納めて、捨ててきてもらいたいわ。わたしは二度とお前さんの作り話など聞きたくはないんだから。」

「うん、わかったよ。」と牛飼いはいいました。「明日、早起きして、わしの話はみんな袋に詰めよう。それから、田んぼのむこうの森へゆき、話の袋を全部からっぽにしてこよう。」

「村びとの話では、その道は危険で、森には蛇や虎がいっぱいいるとのことだ。わしは出かけるが、二度と帰ってこれないかもしれないなあ。」

しかし、おかみさんの返事はこうでした。「お前さんが帰ってこようが帰ってこれまいが、わたしは気にかけやしません。でも、どうかその馬鹿げた話だけは捨ててきてもらいたいわ。もうそんな話は真っ平なんだから。」

翌朝のこと、牛飼いのおかみさんは早起きして、夫にお米とミルクでご馳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

走を作りました。陽が昇る前に、牛飼いは村を出て森の道へと向かいました。

おかみさんは一日じゅう家のなかに閉じこもって、夫の帰りを待っていました。陽が沈む頃になって、夫が村にたどりつくのをみとめると、彼女は飛び出して夫を迎えました。

「お前さん、馬鹿げた話は袋からみんな空けてきたんでしょうね。」と彼女は尋ねました。

「うーん」、といって彼は答えました。「袋を空ける暇がなかったのだよ。というわけは、森へ着くと大へん奇妙なことが起こったんだ。わしは虎に出くわした。虎は藪から跳び出して追っかけてきた。一生懸命に逃げたが虎の脚は速い。虎がわしにつかみかかろうとしたので、わしはバナナの木の枝に跳びついて幹によじ登ったんだ。虎もわしを追って木にはい登ってきた。わしが高く登れば、虎もまた高く登ってくる。わしと虎が登りっこして雲までとどいたとき、バナナの木は揺れだして、ついに折れてしまった。虎は森へ

墜落したが、幸いにも、わしはお前の兄さんの家の屋根にはずんで落ちたんだ。兄さんのおかみさんがおもちを作って、帰る前に御馳走してくれたよ。嘘だと思うかい。そうだ、お前もこのおもちをいただきなよ。」

牛飼いのおかみさんは腹が立ったが、笑いをこらえることができませんでした。

「お前さん。」と彼女はいった。「あなたはなんと作り話が上手なんでしょうね。わたしは話の袋を空にするようにと森へ送り出したのに、あなたはまた新しい作り話で袋を一杯にして帰ってくるなんて！」

二　陶工の娘

――パキスタン――

むかし、シェナブ川（インダス川の上流、パンジャブ地方の川）のほとりのグジラートの町にツーラという裕福な陶工が住んでいました。彼の工房で作られた陶器はその名声が知れわたって、遠くの国からも商人たちがラクダに乗ってやってきました。彼は轆轤を使って、色とりどりのきれいな模様をつけた水瓶や水差しや鉢を作っていました。

ツーラの工房に、ソフニという娘が手伝いをしていました。ソフニという言葉は美しいという意味です。ソフニは美しい上に賢い娘でした。彼女は父を手伝って工房をきれいにかたづけ、また陶器を求めにきたお客を丁重にも

てなしました。彼女に会ったお客はみんないいました。『ツーラの家になんときれいな娘がいるんだろう。それに工房ではお父さんを手伝ってかいがいしいこと。』彼女の美しさを伝え聞いた人びとは、彼女をひと目でも見ようとやってくるのでした。そして、要りもしないのに、彼女から壺を買ってしまうのでした。それはほんとうなんですよ。

ある日のこと、大キャラバン（隊商）を組んだ裕福な商人たちが、ラクダに乗ってグジラートの町へやってきました。この商人たちは、トルキスタンの大都市バルク（アフガニスタンの北部の町）から、はるばる旅を続けてきたのです。彼らはデリー（インド）にあるモンゴル王シャー・ジェハンの宮廷を訪れたのでした。いまは、金銀や沢山の宝石をラクダに積んで、郷里へ帰る途中です。

そのキャラバンの商人のなかに、イザト・ベッグというハンサムで恵まれた若者がおりました。彼の父親はバルクの裕福な商人で、息子をこのキャラ

バンに参加させたくはなかったのでしたが、イザトは世に知られたデリーの町を見たいといってキャラバンについてきたのでした。

一行はテントで一夜を過ごしてから、グジラートの町に見物に出かけました。彼らはツーラの工房までくると、その美事な陶器の前で足を停(と)め、陶鉢を求めようと工房へ入りました。イザトも一緒(いっしょ)でした。

ツーラにはその商人たちが裕福なお客にみえたから、ソフニを呼んでお客をもてなしました。ソフニは工房から父の作った高級の陶器を運んできました。商人たちはソフニの美しさに眼をうばわれ、うっとりと彼女をみつめるのでした。

一人が「なんと美しい娘だ」といいました。また一人がいいました。「うーん、パンジャブ（インダス川上流の五つ(パンジ)の川のある地方）の女には気をつけることだな。」

ツーラとソフニには、商人たちが何といっているのか、さっぱり言葉が判

りませんでした。というのは、彼らはトルキスタンの言葉で話し合っていたからです。イザト・ベックはおしだまって、ただ美しいソフニをみつめるばかりでした。

商人たちは鉢を選び求めて代金を払い、工房をあとにキャンプへ帰りました。イザトの頭のなかは、ただソフニのことばかり浮んでくるのでした。彼は仲間からはずれて、一人でテントのなかに坐っていました。何一つ食べも飲みもせずに。そして、夜になっても眠れませんでした。

翌朝、彼は一人で工房へ出かけました。ツーラが出てくると、イザトは一つの陶器を指さし、それが欲しいと手振りで示しました。彼はその陶器を買い求めながら、長いことといとおしそうにソフニをみつめ、それからやっと工房をあとにするのでした。

さて、一緒に旅をしてきた商人たちはこの町がたいへん気に入ったので、グジラートでの滞在を数日間延ばすことにしました。それにはイザト・ベッ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com